## 【コメント】

### 山川　曉 YAMAKAWA Aki

モニカ・ベーテさんとは古くからのお知り合いですが、こうやってどういうふうに研究を進めていらしたのかを聞くのは初めてですので、私も非常に面白く伺いました。日ごろからアメリカやヨーロッパの研究者の方とお会いしていて、日本の工芸史研究というものと、海外の工芸史研究というものの中にある違いのようなものを感じていたので、それを少し簡単にお話しして、コメントに代えられればと思います。

モニカ・ベーテさんは、身体性、自分の手の経験、織ってみる、染めてみる、そういったことを非常に重要視されて、その世界からアカデミックワールドとおっしゃいましたけれども、美術史、工芸史、能楽史という世界へ近づいていかれたとおっしゃっていました。欧米の研究者、特に染織――私は染織史が専門ですけれども――をなさっている方は、大体皆さん染めるとか、織るとか、編むとか、何らかの手の経験を重要視されていて、それをきちんと描写できなければ、ノートが取れなければ、研究には入れないという姿勢をお持ちだと思います。

日本において美術史の中の工芸史というものは、長く、「文様史」という部分も非常に強くて、文様にはどういう意味があるとか、モニカさんも最初におっしゃったように、社会の中でこの色はどう思われていたか、という研究が主流でした。コンテクスト、どの文脈の中でとらえるかというのはいろいろありますが、技法からとらえるという考え方は比較的少ない分野でした。というのも、研究者と職人の間の架け橋は狭く、お互いに利用し合うことはあっても一緒に研究して前へ進むというのは比較的希薄だったからです。外国の研究者の方とお会いすると、特に織物ですけれども、織物というのはある種機械産業、装置産業ですから、ある程度織機が共通していれば、全世界的に分類したり、研究したりできるので日本と欧米では違うというのは前々から私も感じておりました。

モニカ・ベーテさんのように一種職人の世界へ飛び込んでいかれる研究者というのは、日本では比較的というより非常に少ないと思います。ですから、自分で染めて自分で織ってみて家に機（はた）があるという研究者は、特に染織史を美術史から始めた者から考えると、ほとんどお会いしたことがない。

時々製作をされているほうから美術史へ入ってこられた方はあるのですけれども、非常に少ないと思います。モニカ・ベーテさん、Los Angeles County Museumのタケダさん、タケダさんももともとは染織作家でいらっしゃった方です。そういった方々とお付き合いしていく中で、実際につくる、つくり方、装置というものを考えて研究することの重要性を私も考えるようになりました。たとえば、全世界共通のノート、つまりそのノートを見れば日本であれ、ヨーロッパであれ、アメリカであれ、みんながその織物を想像できるようなノートを取る共通の方法というのが、欧米では国際染織学会（CIETA）というのがありまして、そこのフォーマットのようなものがあって方法が確立しているのですが、日本でそれをする人はほとんどいらっしゃらないというのが現状です。私自身がそういった方々に影響を受けて、モニカさんと昨年一緒にミルトンサンデーという、「織の組織学」という世界があるのですが、その世界で第一線の研究者ですけれども、その方のセミナーに参加して、いかに織物を分析して記述するか、見たものをどういうふうに文字に直すかということを学んできたのです。日本の染織研究も、社会性ですとか、文様の歴史、意味を読むという立場からすれば、当然その社会に近い人間が有利なわけです。文献もたくさん読めますし、ハンディキャップが少ない。ただ、日本の染織を世界の染織の中でどうとらえるかとか、実際に染織史というのは、ある作品からどれだけの情報を読み取れるかというのが非常に重要ですから、いかにきちんとしたノートが取れて、時代性を決め得るカギがどこにあるのか、染織史を編年していく上で、この技法なら必ず室町時代でいいとか、そういうことが言えるのかという問題をこれからは考えていかないと、日本の染織史も前に進んでいくための大きな道をひとつ失うのではないかというのが、私が今染織を研究していて思うことです。

外国の方が日本にいらっしゃって、日本の研究者がなかなか飛び込まない職人の世界へ飛び込む。実はそこに日本人には非常に大きな壁があります。技法を盗まれるのではないかとか、日本人同士ですとそういう問題もあるのかもしれません。文様史とか社会史の中で読んでいく染織の研究と、織物・染物そのものを研究していくという、その両方がこれから交ざり合って前へ進んでいくためには、私は海外の研究者の方からの視点を日本の研究者も学ぶべきではないかと日々思っております。

〈ベーテ〉言い忘れたことが一つあります。西洋と日本の染織を平等に、並行に勉強して、いろいろ調べたことがあります。「織り」のほうは織組織とか、そういうものは明らかに西洋のほうは分析がきちんとしているのです。逆に言うと、「染め」のほうは、日本のほうが明らかに敏感できちんとうまく説

明できるのです。コントロールされている。だから、西洋のほうの染めはすごくあいまい。そういう染めの説明、染めの分析などは、本当に私の知っている範囲——もちろん知らないところもあると思いますけれども——知っている範囲で、染めのほうでしたら色のつくり方は、大体取って、湯がいて、媒染入れて、「はい、こんな色」ですが、こういうふうにこういう色を細かく細かく砕いて色を出すということはあまりありません。Indigo、藍以外で、藍は別問題です。